



平成25年度 J A 共済総研セミナー（平成26年 3 月12日開催）

自然と人間の協働による 永続的な地域社会づくり

～食・自然エネルギー・ケアでつながる新たな生活基盤の可能性を探る～

趣旨説明

人間力と地域力を掘り起こす

主席研究員 川井 真

（J A 共済総研セミナー・コーディネーター）

1. はじめに

J A 共済総研セミナーは、昨年まで、外部有識者の方をお招きしてご講演をいただき、いわゆる講演会という形式で開催してまいりました。しかし今年度は、私たちが実施する調査研究の成果を、その過程で見えてきた課題や今後の展望なども随所に織り交ぜながら、研究報告会というスタイルで進めさせていただきます。そこで全体の構成も一新しています。今回ご報告させていただくのは、J A 共済総合研究所の研究事業の柱である農山漁村地域における実証研究に関するものです。

2. 研究コンセプト

まず研究コンセプトですが、昨今、とりわけ農山漁村については、残念なことに、明るい未来を予感させるような話題が少なくなっています。そこで、私たち自身が農山漁村地域の生活と自然に深くかかわりながら、研究活動を通して、地域の方々が新たな一歩を踏み出すためのお手伝いができないだろうか、と考えるようになりました。

しかしそれには、従来の課題解決型の研究

から知識創造型の研究へとシフトしていかなければいけないのだろう、という予感がありました。なぜなら、地域社会が抱える問題は——もちろん地域社会そのものも——複雑系です。すなわち相互に依存しあう複数の“部分”により“全体”が構成されているため、“部分”へのアプローチから“全体”の挙動を明らかにすることができません。まさに様々な構成要素が非線型に連関するネットワークなのです。したがって、ひとつの課題を解決しようとするすると別の問題が浮上して前方を塞ぎます。たとえば「医療や介護の体制を強化したい」と思っても、地域の財政やマンパワーは枯渇しているため、財政の確保と専門人材の調達、その育成などを同時並行的に検討しなければなりません。また「商店街を再生してまちを活性化したい」とか「教育を充実させたい」と思ってみても、多くの農山漁村地域では人口の減少が、とりわけ若年人口の流出が顕著なため、どうしても消極的になってしまいます。

そこで私たちは、この複雑に絡み合った糸を丁寧にほぐしながら、また自然と人間が織

り成す生命の営みを再確認、再評価しながら、農山漁村地域という全体にアプローチしていく横断的で多角的な研究ができないかと考え、議論を重ねてまいりました。

そして、学際的な研究チームを構成して地域の中へと入っていき、地域住民の方々の活動を多方面から積極的に支援していく実証研究、すなわちアクションリサーチという方法が、この研究には最も適しているという結論に至りました。それが本研究プロジェクトの始まりとなります。

3. 三河地域での協同

(1) 登壇者のご紹介

では、今回ご登壇いただく皆さまのご紹介をさせていただきます。

ご登壇順に、まず JA 愛知厚生連足助病院院長の早川富博先生、次に JA 愛知東の河合勝正組合長、それから東京農業大学農山村支援センター副代表で NPO 法人共存の森ネットワーク理事長の濹澤寿一先生です。以上がセミナー前半で個別報告をしていただく皆さまです。そして最後に、本セミナーでは後半のディスカッションに加わっていただきますが、日本を代表する思想家、人類学者であり、明治大学野生の科学研究所所長の中沢新一先生です。

これまで、この4名の方々と協働して愛知県三河地域での研究を進めてまいりましたが、この方々に共同研究者という表現はふさわしくないと考えています。むしろ「これから日本はこの方向に進まなければいけない」という、同じ未来を見ている同志であると感じています。

じつは本会場にも、この研究を支援してくださる研究者や活動家の方が大勢かけつけてくださっています。この方々とも協同し、地域の中へと入っていき、住民とともに地域の

セミナー登壇者



未来を築いていく、そのような研究を進めていくタイミングがすでに到来しているのだと思います。

(2) 香嵐溪シンポジウム

それでは、三河地域での活動をご報告いたします。

三河中山間地域では毎年1回、大がかりなシンポジウムを開催しています。全住民に参加を呼びかける「香嵐溪シンポジウム」です。2011年と2012年は足助交流館という豊田市の施設を利用して開催しました。この企画・運営を担ってくださっているのが、早川先生と足助病院のスタッフです。

2011年は初回でしたので、私が司会進行を務めさせていただきました。このときのテーマは「三河中山間の地域力を考える～十年後の地域をみんなで想像しよう～」でした。その基調講演を濹澤寿一先生にお願いしています。

2012年のテーマは「三河中山間地域高齢者の生活と健康」で、早川先生、河合組合長、そして中沢先生による鼎談を行いました。

香嵐溪シンポジウム2011の風景



香嵐溪シンポジウム2012の風景



(3) 地道な継続活動

こうしたイベント型の企画だけではなく、地道な活動も続けています。

たとえば、早川先生が中心となって集落単位の座談会を継続的に実施しています。ここでは健康価値の創造が中心テーマとなりますが、「健康を維持するためには地域そのものの健康を考えていかなければいけない」というコンセプトのもとで、顔の見える関係、温もりの届く範囲でいろいろな議論が行われています。いま話題になっている防災・減災対策においても、このような地域基盤が大切なことは明らかです。

早川先生は、活動を深化させるために澁澤先生からご教示いただいた“聞き書き”のテクニックを実践されているらしい、との話を

小耳にはさみました。素晴らしいことです。まさに知識創造型研究の成果といっても過言ではないと思います。

また去年は、中沢先生と一緒にJA愛知東を訪問し女性部との懇談会を行いました。恥ずかしながら、JA女性部の底力というものをおこのとき初めて知りました。六次産業化という言葉では表現できない、もっと深い精神世界を彼女たちは創り出していて、素晴らしいネットワークを構成しています。活動報告を伺い、思わず中沢先生と顔を見合わせて深くうなずいてしまいました。これからのJAそして地域は、もしかするとJA女性部が支えていくのではないかと、思えるくらいの力強さでした。

JA愛知東女性部懇談会



4. 今後の研究に向けて

(1) 地域資源を結び合わせる「共」

こうした一連の活動を続けてきて、見えてきたものがあります。

社会機能を健全に維持しているのは「公」でもなければ「私」でもない、「共」という領域を感覚的にとらえている人たちがこの機能を担っている、ということが徐々にわかってきたのです。

「共」という感覚はどこから派生してくる

のでしょう。それは「地域で生きる」ということ。喜びや悲しみ、禍福を共有しながらその地域で生きていく、あるいは「生きていくしかない」という“リアル”です。それがなければ本当のコミュニティ、すなわち永続的な地域社会づくりはできないのだろうということに、はっきりと気づかされました。

すでに多くの農山漁村地域の交差空間から「共」が生まれています。それを感じ取っている人たちが、ソーシャルビジネスやコミュニティビジネスのようなスタイルを用いて、地域の資源すなわち人や組織や自然や文化などを網の目のように結びつけながら、地域システムを補完している姿がうっすらと見えてきています。

ただ一方で、これを維持・発展させていくためには、外部からの支援が少なからず必要になることもわかってきました。したがって、私たちが本研究に取り組む意義も、そこに見出すことができます。

(2) まちづくりの思想

最後になりますが、研究コンセプトを補完する意味で、大切な部分を「まちづくりの思想」として整理してみました。

まず、まちづくりは住民参加型の取り組みである、ということです。ただ無理をしてはいけません。それは住民自身の生活の延長線上にある活動でなければならないからです。そしてそれは、「わたしのまち」という自信と誇りに裏付けられたものでなければなりません。

最も大切なことは、個々の活動がすべての住民の“生活の内実”を豊かにすることにつながる、という暗黙知のようなものが醸成されていく必要があるということです。まさに住民一人ひとりの自立と主体性を重視するものでなければならないということでしょう。

私たちは黒子に徹しながらも、そこから明確な研究成果を出していなければなりません。これから求められるのは、地域のキーパーソンとなる人たちを育成し、そして彼らによって地域の活性化が図られていくことです。彼らが創り出す産業そして経済は、現在のそれとは異なり、生命系と調和するものになるでしょう。本研究プロジェクトのサブテーマに「食・自然エネルギー・ケア」というキーワードを挙げた意味も、そこにあります。

まさにこれが、私たちが目指す研究のグランドデザインです。

「地域研究」のグランドデザイン

